

七月二〇日、国連安保理は、米帝が主導してきたイラン＝イラク戦争停戦案を決議した。この停戦案に対してイラク側は「イランが受諾するなら」と条件つきの受け入れの態度を表明し、イラン側は公式回答を避けさせていた。しかし、イランの側の態度は明確であった。この国連決議には、イランが要求していたイラクを侵略者として規定することがもりこまれておらず、イラン側が強く非難していたのはこの点であった。

七月二〇日、国連安保理は、米帝が主導してきたイラン＝イラク戦争停戦案を決議した。この停戦案に対してイラク側は「イランが受諾するなら」と条件つきの受け入れの態度を表明し、イラン側は公式回答を避けさせていた。しかし、イランの側の態度は明確であった。この国連決議には、イランが要求していたイラクを侵略者として規定することがもりこまれておらず、イラン側が強く非難していたのはこの点であった。

停戦決議と、それに対するイラン、より決死作戦で攻撃するという警告を繰り返してきた。それゆえに、こつていた米帝は、決議が実行されないということを、その正当化の材料にしつつ、七月二二日、米国籍に移籍したクウェート・タンカーの護衛を強行した。

イランは、これまで米帝の軍事挑発であるクウェート・タンカー船「護衛」強行に対して、ホルムズ海峡周辺に配備されたと言われるシルク・ウォーム・ミサイル、革命防衛軍に

威信回復狙う米帝

一九八七年八月一〇日

目次

威信回復狙う米帝	1
米国のガルフ問題への関わり方(資料①)	7
レバノン共産党書記長インタビュー(資料②)	10
激動の中東ドキュメント(1987年7月11日～8月10日)	13



第27号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL. (03) 291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費20000円

衛」の無能さを白日の下に暴き出し、米帝の立場を悪くするものとなつた。この事態にあわてた米帝は、西欧諸国に機雷掃海艇派遣を要求した。しかし、米帝の安定ではなく、緊張を高めるところとなることを恐れたほとんどが、西欧諸国は、これを拒否し、今のところ唯一の「護衛」の強行は、ガルフの緊張を一挙的に高め、ガルフ戦争拡大の危機に陥れたのである。

二二日に出発した米海軍に「護衛」されたクウェート・タンカーは、イランが警告を發していたような直接攻撃は受けなかつたものの、二隻のうち一隻が、クウェートにむけた航行中機雷に触れ、船体に損傷を受けた。この事態は、米海軍艦による「護

衛」の無能さを白日の下に暴き出し、米帝の立場を悪くするものとなつた。この事態にあわてた米帝は、西欧諸国に機雷掃海艇派遣を要求した。しかし、米帝の安定ではなく、緊張を高めるところとなることを恐れたほとんどが、西欧諸国は、これを拒否し、今のところ唯一の「護衛」の強行は、ガルフの緊張を一挙的に高め、ガルフ戦争拡大の危機に陥れたのである。

二二日に出発した米海軍に「護衛」されたクウェート・タンカーは、イランが警告を發していたような直接攻撃は受けなかつたものの、二隻のうち一隻が、クウェートにむけた航行中機雷に触れ、船体に損傷を受けた。この事態は、米海軍によるガルフでの挑発が続けられている最中の七月三一日、聖地メッカで、イラン巡礼団とサウジアラビア治安軍が衝突した。それは、四〇〇人から六〇〇人と言われる死者を出す大惨事となつた。これは、イランとサウジアラビアの直接的対

この事件はまた、中東諸国にはとりわけ大きく影響し、「友好」国である米帝が、敵であるイランと秘密交渉していたという事が、米帝のアラブ諸国での威信を落としていたのである。そして、ソ連の影響力を強めることとも結果してきた。

また、欧州にも同様の影響を与えてきた。

その失った威信回復のために、米帝レーガンは、今年六月のベネチア・サミットから着々と準備してきたと言える。「ガルフの自由航行防衛者」として威信回復することをめざしてきたのである。国連安保理における停戦案作り（イラクに開戦責任を帰介し、米帝がガルフ諸国の防衛者として威信回復することをめざしてもりこまれなかつた）、それをのまないイランが米国籍のクウェート・タンカーを攻撃したら即応戦するべきとするイランの要求内容はいう筋書きである。いわば、政治合法性を、イランによる国連停戦案の実質的拒否から得たのである。一応

二、メツカ事件

合意の手続きに全呂すませたといふ形、体裁を整え終わつての「護衛」開始となっている。そして、クウェート・タンカーが二回も衝突し被害を受けたのを機に、NATO同盟国に対しても機雷掃海部隊派遣を要請し、日帝に対しても「シーレーン防衛の発動」を要求している。

二、メッカ事件

こうした中で、メッカ事件が起きた。これは、イランのやり方からすれば、いざれおきるものと予想はされていた。なぜなら、ここ数年、メッカ巡礼をイスラム革命の宣伝の場にするべく、イラン巡礼団は毎年政治デモを行ってきたのだが、サウジ側が報道管制をしいたり、事を荒だてない対応をしてきたので、今回のような大惨事に到らなかつただけである。

イランの側は、サウジアラビアを対立に引きこみ、圧力をかけるために、今年もメッカで大々的な反米デモをやるよう組織していた。巡礼団壮行会で伝えられたホメイニ師のメッセージは、「メッカ巡礼をイスラムの統一の機会とすべく努力しよう」というものであつたと言われている。そして、実際に七月二〇日に

米・反ソ・反イスラエルデモを行い、サウジアラビアの巡礼規制に対抗している。三一日の大衝突後、イランは即、反サウジアラビア・キャンペーンに出た。「カーバ神殿をサウジ王家から奪回せよ。殺された善良なるイスラムの復讐を」と宣言した。テヘランのサウジ大使館、クウェート大使館は攻撃され、各々四人、二人の外交官が誘拐された。レバノンにおいては、ハジビッラーがサウジアラビアへの抗議行動を起こし、西ベイルートのサウジ大使館、文化センター、サウジ航空が爆弾攻撃を受けた。

死者四〇〇人から六〇〇人と言われる衝突は、サウジ王家自身も予想していないかつたことであろうし、サウジアラビアはイランに対する態度の明確化を迫られた。

これに対して、エジプトは遅くサウジ支持、イラン非難を打ち出している。ICO緊急会議を呼びかけた。はっきりとイラン支持を打ち出しているイスラム国はないに度が注目されていたシリアルも、サウジアラビアに同情を示すなど、メツカ事件を機に、イランは、イスラム諸国内で政治的に孤立した形になつている。

Cサミットにおいて、イラン敵視から、イランとの協調方向に転換している。サウジ王家、また湾岸諸国の中でも、イランとの戦闘の拡大を恐れる諸国は、イランとの対話、イラン懐柔によって、イランが戦争を拡大させぬよう、また、テロルを回避しようとしてきた。

そして、「イランゲート」事件の発覚、さらに、イランが米国から入手した武器を使ってイラクへ大攻撃をかけたこと等から、アラブ諸国は、米帝が秘密にイランに手を貸していたことを知り、米帝への不信を増大させ、独自に、イランとの対立回避、シリアーソ連を介してイランへの停戦の働きかけを中心に行うようになっていたのである。

今回の米帝によるクウェート・タンカー「護衛」問題においても、当初アラブ諸国は、ガルフ戦争拡大につながることから難色を示していた。米帝の側は、アラブの「友好」国の「防衛者」として、その圧倒的な軍事力をもって自らを誇示し、それによって、ソ連の影響力拡大を抑止し、「イランゲート」事件で失ったアラブ諸国への威信回復を計ろうとしてきた。

鞥を与えることになつた
中東におけるもう一つの火柱、レバノンでは、カラミ首相暗殺を契機として盛り上った反ジエマイエル大統領、反右翼の統一戦線結成の気運が、安定化へむけたステップとしてのレバノン諸勢力の再編として成功せず、安定化への道は一歩後退した。これで、ジエマイエル大統領、LF等の対シリア強硬姿勢を崩すことができず、また、反ジエマイエル大統領・反右翼勢力内の矛盾を表面化させることになつた。そして、それはそうした統一戦線形成を推進してきたシリアの側の後退を意味している。
そして、南部においては、パレスチナ勢力対アマルの「キャンプ戦争」が再びくすぶり始めている。

国主義は、パリーテヘランの大使館戦争を契機として、イランとの断交を行いこれまでの対イラン和解路線から一転して強硬姿勢に出ている）。英帝は、昨年の米帝によるリビア爆撃時における対米協力にもみられるごとく、レーガンの軍事冒険主義に同調している。そのうえに、仏帝が二隻、英帝が四隻の機雷掃海艇を出動させることになっている。

米帝は、明確に国連安保理停戦決議を主導的に作り出すことによって、米帝が緊張を高めることではなく、停戦を求めていることを宣伝し、同時にクウェート・タンカー「護衛」正当化を行おうとしてきた。

これは、先の「先進七カ国経済首脳会議」（サミット）の結果でも明らかのように、米帝の軍事行動がガルフ戦争拡大の危険性を持っていることから、同盟諸国でさえ、米帝の立場の「政治」的支持にとどまり、

国内世論への説明として、ソ連のガルフ諸国への影響力の拡大阻止の必要性を、米帝は主張してきていたところが、ソ連は、ガルフでの軍事存在を緊張緩和のために引きあげると表明した。このため、米帝の行動の正当性が弱くなっていた。

また、ガルフにおける米帝の「友好」国自身も、米帝の存在がガルフ戦争拡大を導くものでしかないということから、米帝の行動に賛成しきれずにいた。

こうしたことから、米帝が国連安保理決議のために動くことは、同盟諸国、「友好」国への正当化のための材料でしかなかつたのである。

レーغان政権がここまで軍事緊張を高めざるをえない根拠は何なのかな？ 第一には、米国内世論が、「伊朗ゲート事件」（または「イラン－『コントラ』事件」）で、レーغان政権に失望していることへの回答

武器代金を、ニカラグア反政府勢力（「コントラ」）への地下資金として流用する計画。実行については、レー・ガンは「知らされていなかつたこと。「イランゲート」が暴露され、以降（八六年一月初旬）、レー・ガンの「知らぬ間に」部下が証拠書類隠めつを行っていたこと。ノース中佐は、「コントラ」への援助、「コントラ」との共同は、米国議会の凍結決議に従わなかつたのではなく、「心からの愛国心」からやつしたことであると居直っていること。証拠書類が隠めつされてしまったので、誰がどこまで本当のことを証言しているのか立証できないこと、等等。ホワイトハウスを統轄していないう大統領、対「テロ」強硬論、iranへの武器禁輸を主張しながら、実は伊朗と取引した大統領であるという事実が浮かび上がっているのである。

立を生み出し、これまでそれを避け
てきたサウジアラビアに対し、イラ
ンへの対応を迫るものとなつた。こ
れは、ガルフ戦争拡大の新たな危機
として、近隣アラブ諸国に大きな衝
撃を与えた。とりわけサウジと同様
に、イランとの直接的対立を避けて
きたガルフ湾岸諸国に最も大きな衝

強行した。そして、ガルフ内での艦隊を増強したばかりか、ホルムズ海峡の出口にも空母率いる機動隊を配備し、現在機雷掃海用のヘリ空母がダルカナルの到着を待っている。さらに、仏帝国主義も、自國船舶護衛という名目で、空母クレマンソー以降三隻の艦隊を派遣している（ム帝

もっぱら国連での停戦努力を中心にが
移されてきた。それは、米海軍のク
ウェート・タンカー「護衛」に対す
る支持が少なかつたことを意味して
いる。また、米国内世論、議会でも
反対の声が多く、米帝自身も停戦を
求めているのだということを示す必
要があった。

握る人物、元NSC軍政次官、元NSC長官らの証言が七月初旬から始まり、現検事総長、現国務長官、現国防長官の証言、談話が、次のようにな事實を七月二〇日前後に明らかにしている。レーガンは、米人人質釈放のために、イランへの武器売却を

反シリア勢力、米帝、欧帝等の国際的支援をとりつけようと策動している。とくに、米帝が、シリアをまきこんだ中東和平、そしてレバノン安定化へ踏みきったのに警戒し、ダニ・・シャムーンを渡米させ、米帝の支持を取りつけようとした。欧州にはLFの副司令官を派遣して、やはり支持を取りつけようとしてきた。ところが、米帝は、レバノンの正式の立法機関の決定でないものは支持できない、レバノンの統一と独立を支持すると回答し、右翼がカントンを合法化しようとするのに反対している。そして、レバノン－シリア協調の見地に立って、米政府に対してもジェマイエル大統領から要請あるまで介入しないという意向を伝えている。そして、ジェマイエル大統領もマロン派カントン合法化には反対し、右翼の策動を失敗させている。

米帝は、ジェマイエル大統領－シリアルの協調による問題解決の方向において、レバノン問題の安定化を展望している。しかし、すでに明らかのように、シリアが人質問題で失敗した分、シリアの地位を低下させることになった。それは、米帝が、よりジェマイエルの後楯として動いていくことを意味している。

四、パレスチナ革命の現状

シリアルのほうは、こうした情況の中で、レバノン全勢力との均衡外交へと、もう一度戻し、再度全体をまきこんだ一つの流れへと再々編していくことを模索している。今回のメツカ事件において、シリアはイラン－サウジアラビアの間を仲介しようとしたが、イラン－サウジアラビアの直接交渉が行われていた。シリアには事後的な了解が届くのみになっていたり、今までシリアが占めてきた地位・立場が困難になつてゐる。つまり、イラン－アラブ反動の仲介者としての位置に立つて、双方から利益を引き出してきたシリアルだが、現在は、いわばシリアの仲介なしで事が進み得るようになつてしまつたということである。レバノン問題内政を含め、シリアは転換を問われ岐路に立つてゐる。

さらにULFは、PLOとの関係

L.F.はカイロ協定破棄を支持しており、アマル・シリヤの立場を反映している。アマルは、南部、西ベイルートにしか自分の宗派基盤を持たないので、南部の安定を望んでいる。この間、南部の安定（イスラエルから攻撃されないこと）を計るため、より鮮明にパレスチナ人追い出しの策動を強めている。そこから、パレスチナ勢力に挑発を行い、戦闘が起っている。さらには、ハジビッラー、パレスチナ勢力が対シオニスト戦、対「S.L.A」戦を展開するのに介入し、具体的に阻止する活動に出ている。こうして南部における「キャンプ戦争」再燃、そしてアマル対ハジビッラーの戦闘が起ころう的可能性が生じている。これは、パレスチナ革命にとつての困難な状況の継続を意味する。

四、パレスチナ革命の現状
 シリアルのレバノン再編努力の失敗は、パレスチナ革命にとっては、どのような影響を与えているだろうか？シリアルが均衡外交をてこに再々編していく方向をとっているためには、規制緩和が進んでいくといふ肯定面が出ている。と同時に、縮小されたULFとの関係では、II

よりも、P N S F を新しい関係の対象にする傾向を持つている。これもアマル、また、これまでのシリアの対応の反映であつたが、シリアが現在レバノン安定化に失敗しているので、シリアーP L O 関係再確立の可能性が生じている。

つていつた。実体的には、アラブ界に着実に復帰しているエジプトとの関係ぬきに、アラブレベルで PLO の政治的地位を保つことはできないとするのが、アラファト議長の考え方であろう。とくに、この間のガルフ戦激化の中で、クウェートはエジプトと軍事問題を検討し、エジプトに経済使節を派遣する等、エジプトの

L.F.はカイロ協定破棄を支持しており、アマル・シリヤの立場を反映している。アマルは、南部、西ベイルートにしか自分の宗派基盤を持たないので、南部の安定を望んでいる。この間、南部の安定（イスラエルから攻撃されないこと）を計るため、より鮮明にパレスチナ人追い出しの策動を強めている。そこから、パレスチナ勢力に挑発を行い、戦闘が起っている。さらには、ハジビッラー、パレスチナ勢力が対シオニスト戦、対「S.L.A」戦を展開するのに介入し、具体的に阻止する活動に出ている。こうして南部における「キャンプ戦争」再燃、そしてアマル対ハジビッラーの戦闘が起ころう的可能性が生じている。これは、パレスチナ革命にとつての困難な状況の継続を意味する。

つていつた。実体的には、アラブ界に着実に復帰しているエジプトとの関係ぬきに、アラブレベルで PLO の政治的地位を保つことはできないとするのが、アラファト議長の考え方であろう。とくに、この間のガルフ戦激化の中で、クウェートはエジプトと軍事問題を検討し、エジプトに経済使節を派遣する等、エジプトの

失った威信の回復ができると米帝は考
えているのである。

しかし、こうした米帝の意図は成
功していない。サウジアラビアとイー^{ラン}の間の非難の応酬が八月三日に
は終^ること、また、ガルフ諸国
の中には、機雷掃海のイランの申
出を受け入れる姿勢を示す国がある
など、逆に、もつそ^うイランとの矛
盾回避に向かう方向が出ている。

もし、サウジアラビアが、米帝の
意図通りに動いたとすれば、国際中
東和平会議を含む中東情勢の流れに
大きな変化を与えたであろうことは
確実である。さらに、シリア等、反
帝の立場に立つ諸国にも少なからぬ
影響を与えることになったであろう。

米帝の策動は、ここでも失敗して
いる。いたずらにガルフでの緊張を
高めていくことは、ガルフ戦争の拡
大を恐れる諸国をして、ソ連、シリ
アとのバランスを通し、ガルフ安定
化の方向に向かわせることになるだ

七月二二日、ULF（統一解

三、レバノンでの再編と矛盾
七月二二日、ULF（統一解放戦線）が正式に結成された。しかし、カラミ首相暗殺を契機として対右翼マロナイトの広範な統一戦線として

としてある。PSPは、シリアが軍事力で西ベイルートを安定化させる前に持っていたベイルートでの権益を再建設せんとしているとされる。ULLFの元々の構想としては、ホベイカ、フランジエ等マロン派内の反ジェマイエル・反LF部分まで含

「イスラエルがそうであつたように
シリアも、レバノン問題・パレスチナ問題を独力では介入・解決できな
いことが、もはや明らかになつた。
レバノン問題は、レバノン人の手で
解決するしかないし、できる」と言
っている。ここには、対シリアでの

展望されてきたULFは、ホベイカ・フランジエ（マロン派内の親シリア派）、トリボリ・ペイルートのスンニ派、二派が不参加であった。参加したのは、アマル、PSP、共産党、人民ナセル主義者組織（サイダのスンニ派）、レバノン・バース党等にとどまつた。このイスラム進歩派・ベルベルの統一戦線の政治基準は、八六年末のダマスカス三者合意とほぼ同様の内容で、シリアとの特別な関係に立ったうえでのレバノン宗派政治廃止を要求している。

また、統一戦線内でも、足並がそろっているわけではない。とくに、アマルと和解したとされるPSPのジュンブラットは、対右翼政策において、政治的な解決よりも軍事的の対決による解決に重点をおく発言を行つており、アマルとの対決上から、ハジビッラーと関係を作つてゐる。これが、アマル（そしてシリアの基本政策）との矛盾を再燃させる要素

むレバノン人の総意を示す勢力との統一を作り、ジェマイエル大統領、LFをレバノン内の少数派とするところによって、その圧力を通して、政治的解決によるジェマイエル大統領放逐、レバノン統一を果たすことであつた。しかし、ホベイカ、フランジエ、また、イスラムの支配階級を代表するスンニ派の不参加は、ULFを、これまでと同じく民兵組織レベルの統一に狹めてしまった。ジェマイエル大統領—LFに対峙する力としては、弱いものになってしまっている。一説によれば、不参加部分は、ジェマイエル大統領の立場が強まっていることから、初めからうまくいかないと見限って参加しなかつたとも言われている。スンニ派のほうは、この統一戦線が民兵組織の復活につながるということ等の理由から不参加を決めている。

ジェマイエル大統領は、八月一日のレバノン国軍創立記念日の演説で

強硬な立場をより強めており、その立場からシリアとの交渉を行おうとする態度が表われている。こうしたジェマイエルの立場は、欧米帝国主義および海外のレバノン・コミュニティの支持を背景にしたもの」と言われている。

また、シリア自身、ハジビッラーへの統制の失敗などから、レバノン内への統制の失敗を招いている。人質問題の解決のために、シリアはイランとの話し合いを行ってきたが、まとまらず、結局、人質問題が解決できない状態になっていること、そしてジェマイエル大統領をおさえきれなかったことから、シリア自身もレバノン安定化の再編を問われている現状にある。

他方、右翼マロナイト、とくにL.F.は、シリアが後押しするアマル指導下のイスラム左派勢力の対右翼再編に対し、マロン派カントンの「独立内閣」を提唱してきた。そして、

に、一時とりやめていた領事レベルの代表団をイスラエルに派遣した。六七年に断交して以来、最高の公式使節である。ロシア正教会の財産問題の実情把握、交渉のためというのが理由であった。この他、ハンガリーが、初めて世界ユダヤ人会議をダベストで開催するのを許可したとか、ヨーロッパがペレスとの秘密会談後、イスラエルに国営通信社支社を開くとかの動きが目立つている。

六、まとめ

総じて、現在の中東情勢は、中東における威信回復をもくろむ米帝が軍事力を増強したことにより、緊張が高められ、ガルフ戦争拡大の危機が高まっていることが特徴である。サウジアラビア、湾岸諸国に対する米帝の策動は、戦争拡大を促進するものでしかない。そして、その米帝の策動は、大きくは中東和平国際会議問題等に反映してくることになる。米帝のつけは明快である。米帝の庇護の下に生きるのか否か、である。しかし、米帝の展開のしかたが冒險主義的である分、ますますアラブ反動諸国を不安におとし入れるものになつてている。

これに対し、ソ連の側は、緊張緩和を促進する立場と展開をみせ、これがアラブ反動をもひきつけずにはおかないとする。

そうした中で、シリア等の反帝の立場に立つアラブ民族主義国家は、どのようなイニシアチブをとるのかが問われている。P L Oとの和解はそうしたアラブ民族主義総体としての和平、そしてパレスチナ問題の解決に前進をもたらすだろう。

パレスチナ革命自身も、また、どのような革命としての解放を推進す

この辺りは

るのかが問われている。
もう一度起きたら、（ガルフ閉鎖は、
世界の石油埋蔵量の半分がガルフに
ある以上、きっと第二の石油危機に
つながるだろう）あの時と同じくら

ヘンリー・キッシンジャー　への関わり方

シャーが倒れて以来、米国の政策決定者にとって、イランとガルフは悪夢であった。死活権益をどう規定し、どう守るのか、この問題での混乱がカーター政権を倒し、レーガン大統領の二期めを害している。最近では、イランの対イラク陸上戦に対し地下で武器、情報支援を行うといったやり方から、かろうじて米国船と偽装したクウェート船護衛にふみ切ることにより、イラクの対イラク海戦支持を決定して転換させた。

ガルフにおける米国の死活権益とは何であるのかを論ずることにより、ガルフ問題への自由に変えられる関わり方の本質を問うていこう。

ヘ航行の自由

七〇年代を通して、中東石油の供給が中断したことから、その後一〇年間に及ぶインフレ、失業、きびしい不況の時代となつた。石油危機が

いきびしい結果になるだろう。
確かに、米国と比べて歐州や日本
は石油の多くをガルフに依存してい
るのだからガルフ通行の自由がどう
なるかは、より死活問題としてある。
どんな理性的な考え方からしても、石
油供給保護の責任は、歐州、日本が
負うべきものである。

不幸にも、責任の分担はいつも理
性的になされるというわけにはいか
ない。結局、米国は、自國利益の現
実のわなにはめられている。同盟国
が自らの利益を見きわめることができ
ないとしても。石油は代替がきく
ものだ。ガルフの石油が手に入らな
くなつたら、歐州と日本はガルフ以
外の石油に高い値をつけ、一〇年前
のあの石油の急騰、諸物価急騰とい
う事態を再現させることになる。米
国は、ガルフの出入口防衛を一国で
やらざるをえなくなるかもしれない。
しかし、米国の同盟国は、幻想を持
つてはいけない。もし、米国が一国
でやらざるをえないとしたら、すで
に米議会や大衆は同盟国に失望して
いるのだが、それが倍加される。そ

- 7 -

力をイランとの対決に活用していく方向が、従来よりも露骨に出ている。イラク－ヨルダン－エジプトの合同運輸会社の設立、イラクへの義勇軍派遣提案等、イラク支援体制にエジプトは大きな役割を果たしてきた。アラファト議長は、アラブ反動とエジプトをてこに、ヨルダン、シリリアを牽制しつつ、PLOの地位を保つて帰還しようとしている。

こうじたPLOアラファト派と旧PNSFの展開との中間に立つPFLPは、アラファト議長－ムバラク会談で、ますます微妙な立場を問われた。アルジェリアでのPNC決議によれば、「アラブ首脳会議決議によるから」のところ、エジプトがキャンプ・デービッド合意破棄をしない限り、エジプトとの関係改善はない」のであるから。各派がアラファト議長批判（決議違反）を行う中で、PFLPは、その会談時アラファト議長に同行したPFLP中央委員一人を除名した。PFLPの方針に沿わない行動をとったからであるとされる。シリアとの関係上も、PFLPの路線とも、看過しえない行動とされてい

を守るという点では一致できても、現実のアラブ世界の政治にどう関わるのかと、いう点で、パレスチナ革命総体が分裂、再編を繰り返している状況にある。そして、革命の原動力たるパレスチナ人民は、領内における果敢なレジスタンスを開いており、それが領外の指導部を牽引している。

現在、シリアは、レバノン安定化政策の失敗から、全勢力との均衡外交に向かっていることは、すでに述べた。加えて、シリアに対するソ連の圧力が、シリアーPLO和解の可能性を高めてきている。こうした条件下を活用し、PLO・シリアの戦略同盟としての関係を再確立していくことは、中東情勢、また、パレスチナ問題の解決にとって、重要な転換点となり得るだろう。しかし、シリアが現在とっているパレスチナ勢力への規制緩和は、レバノンにおけるパレスチナ勢力の存在と、シリアのレバノン政策との根本的な矛盾を解決するものではない以上、再び、シリアとの矛盾が大きくなっていくだろう。

深まっている。前号で触れたごく、実体としては、八八年後半の選挙へ向けたキャンペーンになつてゐるといえよう。焦点は、中東和平国際会議の流れにどのように介入していくのか、そのために入植村増設強行か否か、ラヴィ戦闘機生産を米帝の反対をおし切つても強行するのか否か、等々。

中東和平国際会議の問題では、来訪したエジプト外相に対しても、シャミルはキャンプ・デービッドに規定された「自治」を進めること、そのためにもイスラエル＝ヨルダン＝エジプト－パレスチナ人代表での交渉過程をスタートさせると提案してきた。シャミル版「国際会議」であるエジプトの側は、受け入れ難いとしている。ヨルダンがアラブからの合法性を得ていないこと、外からの圧力がない限りイスラエルの譲歩はありえないことを、サダトの教訓から身にしみているのである。入植村増設の問題では、未だ一致が作れていない。リクード側のシャロンが既成事実を作ろうとしてブルドーザーを送れば、ペレスが行政令を出して工事をストップさせるという事態に到つている。

最終決定を待つ段階である。国会の同計画検討委員会では、生産強行派が多数を占める票決になつたが、さしもどし票決提案も出している。さらには、米帝は国務長官特使を送り、イスラエル政府に回答を迫つてゐる実情である。生産強行となれば、米帝からの援助は期待できず、国民一人頭二〇〇〇ドルもの資金を捻出せねばならないとされる。ジェット戦闘機（中距離）市場に登場するのか、しないのかの瀬戸際だが、資金のあてが少なくなつてゐる。

こうした分解状況を、和平交渉に動かしていくべく、ソ連をはじめとする社会主義国のイスラエル政策が活発化している。イスラエルにとっては、イデオロギー上も、戦略上も人口問題が大きな問題だが、ソ連のユダヤ人移民政策に変化が生じている。すでに今年の前半で、二〇〇〇人以上のユダヤ人が国外移民したが、四人に一人の割合でしかイスラエルへ向かっていない。これは、ソ連一オーストリアというルートに問題があるとして、イスラエルはソ連ールマニアルートに変更するよう要求している。近くシヤミルがルーマニア訪問する予定だが、この問題が討議されいくだろう。ソ連は、さら

れでも、米国は自由行動権を要求するわけにはいかない。同盟国との間に、具体的にどの航行の自由が危険にさらされているのかを協議して、入念に規定せねばならない。

ヘイランーイラク戦争

根本的な現実は、どちらかが決定的な勝利を得ることは、先進工業国の民主主義（おそらく、ソ連にとっても）の利益に反するという事実である。

イランの決定的勝利は、世界の経済・政治的安定を脅かすだろう。イラクが勝つとしたら（あるいはことではあるが）、宗教政治をとらないイラクをして近隣諸国に圧力をかけようという刺激になるだろう。とすれば、イランーイラク戦争は、米国の政策に二つの中心問題を与えているのである。つまり、どちらかが勝利しつつあるのか？ 次は、そうだとしたら、その傾向をひっくり返す手段があるのか？

ヘガルフにおけるソ連の支配力阻止

この一〇〇年以上、ツァーの時代も共産党の時代も、帝国的野望は、ガルフに足場を作るというものであった。英の介入がなければ、ロシア

一方、イラン、イラク両国に等距離であろうといふので、イランむけ船舶の防衛もやるということになると、イラクから最強の武器、すなわちイラン外貨の最大獲得手段たる石油輸出妨害、これを奪うことになる。

つまり、米国があれこれ正当化しても、行為と発言が矛盾しているのである。何か問題が難しくなつたら、必ずや米国内での不満、反対の声がおきてくるのは、これたためにクウェートのタンカーを護衛するというなら（こういう目的だけが、合理的な目的だ）、その行為の意味、結果を引き受ける準備をしておかねばならない。伊朗の側から明白な挑発もないのに、伊朗に挑戦するとなつたら、それが続くなり、米国が手を引くといふことができなくなるのである。

四、一一隻のクウェート・タンカー護衛は、海戦に決定的影響を与えるものではない。それに、ガルフの海運に対するイランの攻撃を止

が十九世紀に征服してしまった中央アジアの諸公国と同じ運命をたどりであろう。米国の介入がなければ、ソ連がアフガニスタンを占領したのは、何かからの脱線ではない歴史的に、ソ連はイランを得ることを最大の望みにしてきたし、ソ連がガルフを統轄することは最も危険なことである。

さて、クウェート海運への危機といふ時、以上の三つの米国にとっての死活権益がどう関連するというのだろうか？ 一九八六年一二月、米国が地下でイランに武器を売っているのが明らかになってから、友好の両方に対して、クウェート海運の保護を頼んできた。ソ連は、三隻のタンカーをクウェートにリースし、その分については自由な通行保証をうけ負った。数カ月たって、米国はクウェート・タンカー一一隻の米国への移籍に合意した。同時に、ガルフへの米国艦隊の増強を行った。米国政府が航海の自由を主張する

ガルフでの海戦が八一年に始まって以来、計三二〇隻が攻撃を受け、うち二二〇隻を攻撃したのはイラクであった（破壊された船舶はほとんどない）。八六年度でみると、一〇〇隻が攻撃を受け、三対二の割合で、イラクが攻撃した件数のほうが多い。しかし、イラクは、イランの石油ターミナルや積出し施設の数を攻撃しているから、ガルフ石油総体の供給に介入しているという点では、明らかにイランよりもイラクのほうが大きい比重を占めているのだ。どのタンカー攻撃事件をとつてみても、世界的な石油供給過多

一、この危険の奇妙な側面として、とにかく大きな何かが生じたということはなかつた。ガルフの海運總体が受けた攻撃の割合は、（米国への武器積出しを行ってきた頃と同じレベルなのである。何も新たな脅威が生じていないことを最もよく示すのは、八七年度に入つてからガルフの海運に対する保険金が目立つて上昇してもいないということである。

二、公海航行の自由の原則を米国が掲げるのに、実際に航行妨害をより多くやつている側に米国は立つてゐる。

したがつて、米国にとって賢明な政策とは、イラクとソ連が実体的に同盟することによって、イラクが敗北をまぬがれたというようにさせないこと。イランのやり方では、米国としては、イランと対決していく以外手の施しようもないだろう。しかし、ガルフにおけるソ連の脅威を増大するような状況に一方を追いやることによつて、米国の利益が損なわれる、こうしたことになつてゐるのが一方への武器売却ということが、ラクの崩壊を何とか回避するという短期的利益については、米ソは一致することもあるだろう。しかし、長期間的利害は確かに違うのだ。

ガルフ問題を機に東西の政治協力が試しうるという主張は、もつともよく吟味してみなくてはならない。イラクの崩壊を何とか回避するといううたん化すると、ソ連の関与が増幅する人もいる。これが前例となつてパーカーをリースしたのだから、米ソが協力していくかどうかの試験金石にしうると大胆に考える人もいる。

もし米国がガルフでの海戦が始まつた頃に、ガルフ穩健諸国立つて防衛的措置をとつたなら、ソ連の存在を追い出すことも可能だったかもしれない。しかし、ソ連の介入が既成事実化してしまつた後での移

めさせたとしても、それ 자체は、イランーイラクの陸上戦を決定していくものでもない。となると、要は、勝敗を決するもの足りえな軍事的役割を果たすために、米国はガルフ戦にのめりこむという危険を犯しているのである。まきこまれるには足るが、そこでイニシアチブをとるには足りないといふような軍事的関与の仕方を繰り返してはならないのである。

ある人は、ソ連がクウェートにタンカーをリースしたのだから、米国がクウェート・タンカーを移籍、護衛するのは正しいと主張する。なかなか難しいのである。

ガルフ問題を機に東西の政治協力が試しうるという主張は、もつともよく吟味してみなくてはならない。イラクの崩壊を何とか回避するといううたん化すると、ソ連の関与が増幅する人もいる。これが前例となつてパーカーをリースしたのだから、米ソが協力していくかどうかの試験金石にしうると大胆に考える人もいる。

もし米国がガルフでの海戦が始まり立つて防衛的措置をとつたなら、ソ連の存在を追い出すことは可能だったかもしれない。しかし、ソ連の介入が既成事実化してしまつた後での移

したがつて、米国にとって賢明な政策とは、イラクとソ連が実体的に同盟することによって、イラクが敗北をまぬがれたというようにさせないこと。イランのやり方では、米国としては、イランと対決していく以外手の施しようもないだろう。しかし、ガルフにおけるソ連の脅威を増大するような状況に一方を追いやることによつて、米国の利益が損なわれる、こうしたことになつてゐるのが一方への武器売却ということが、ラクの崩壊を何とか回避するといううたん化すると、ソ連の関与が増幅する人もいる。これが前例となつてパーカーをリースしたのだから、米ソが協力していくかどうかの試験金石にしうると大胆に考える人もいる。

もし米国がガルフでの海戦が始まつた頃に、ガルフ稳健諸国立つて防衛的措置をとつたなら、ソ連の存在を追い出すことは可能だったかもしれない。しかし、ソ連の介入が既成事実化してしまつた後での移

したがつて、米国にとって賢明な政策とは、イラクとソ連が実体的に同盟することによって、イラクが敗北をまぬがれたというようにさせないこと。イランのやり方では、米国としては、イランと対決していく以外手の施しようもないだろう。しかし、ガルフにおけるソ連の脅威を増大するような状況に一方を追いやることによつて、米国の利益が損なわれる、こうのことになつてゐるのが一方への武器売却ということが、ラクの崩壊を何とか回避するといううたん化すると、ソ連の関与が増幅する人もいる。これが前例となつてパーカーをリースしたのだから、米ソが協力していくかどうかの試験金石にしうると大胆に考える人もいる。

もし米国がガルフでの海戦が始まり立つて防衛的措置をとつたなら、ソ連の存在を追い出すことは可能だったかもしれない。しかし、ソ連の介入が既成事実化してしまつた後での移

は、特定の地区に固まって住み、その地区を武器庫と化すことにあつて、とまるでシオニストがやつたのと同じように考えているのがジャジャだが、まちがえている。キリスト教徒の力とは、レバノンおよびアラブ民族の統一に脅威を与えるものではないはずだ。シオニストがパレスチナで実行した計画と、ジャジャおよびその一味がやろうとしていること、つまりレバノンのキリスト教徒をシオニスト化した大義、またはシオニストの集團組織に変革しようという破壊的な強欲さ、この二つの間には大きなへだたりがある。力ずくでそっちの方向へもつていこうと、やることは、未だ「ゲットー」の外にいるキリスト教徒が故郷から追わされることにならうし、戦闘の再燃ということになる。

人は、ジャジャ先生一派の頭に水をかけて目をさまさせてやつてしまいと訴えたい。故郷を追われた人々の帰還へむけた一步は、分割計画を放棄することからであり、レバノン危機の民主的解決案に結集することからしか始まらない。そして、それは何よりも、カラミ首相暗殺犯をあばき、処断すること、それから、健全な土台の上にレバノンの国民対話へむけて障害を除去していくことなのである。故郷を追われた人々の帰還とは、ジャジャ先生一派を追い出すことである。

うと努力している。そんな時の発言だからなあさら。

激動の中東 ドキュメント

讀者の皆さんへ
今号から日誌の体裁をかえました。
従来の国別表示から、テーマ別に
情勢の流れを追うようにしていき
ます。読者の皆さんからの御批判
を受け、より良いものにしていき
たいと考えています。

一九八七年七月一日
～八月一〇日

——編集部

記者の皆さんへ
カルフ戦争
・イラク、マジヌーン島の一部奪回
成功と発表。
支持を再確認。

レバノン問題—シリアル
・トリボリで、カラミ首相暗殺四十
日忌。反ジェマイエルー反右翼統
一戦線結成気運盛り上る。キリスト

二 戰闘（二年以前にもあったし、最近ではペイルートで起つた）した段階 この段階では、戰闘に復讐が続き、イスラエルに対して闘つた戦士が故郷を追われ、南部、ペイルート郊外、ペイルートのある地区から共産党员は追われることになった。誰もが、結果としての否定的な影響を受けた。この段階では、我々は本当に悩まされ心配した。なぜなら、時には、アマル自身が弱体化し、アマルが大衆に対して宣言した責任を果たす能力がないという立証していくからである。

この戦闘段階では、民族派勢力は前進することができず、近い将来に民族派の立場を確立することが危くなつたので、困難だった。

こうした経験を活用し、十分な討議をつくしてこの問題を乗り越えていくよう、呼びかける。最近、カッダム氏の事務所でナビーハ・ペリ氏と会見したが、その時、次

等の事件を調査する（二度とおさないために）のが第一の任務である。次の任務は、両者の関係を調整し、あらゆるレベルでの協力を再開すること。イスラエルによる占領に対する民族レジスタンスファランジ党的レバノン分割策動阻止、レバノン経済崩壊策動阻止、大衆が人並に生活していくように援助等の活動を含む。

②共産党とアマルの関係を健全な土台の上に作る。

なぜなら、問題は主にレバノン問題にどう関わるのかということであって、共産党とアマルの間の党派関係ではないのである。

アマルの同盟員がどこでも自由に動け、自由に闘えて、サイダ市内に政治事務所を構えて政治闘争もやれ、山岳部でも、ベカ一でも、北部でも、好きな所で同様なことがやれる状況を作らねばならない。そして P S P も、スール、ナバテイエ、ザハラニ、サイダ、山岳部ベカ一、北部で自由に事務所を構えて活動できる、また、バース党

問　…マスコミによれば、サミール・ジャジヤは、『サイダ郊外へのキリスト教徒の帰還はやろうと思えばいつでもやれる。それを遅らせているのは、故郷を追われたキリスト教徒全体の帰還をどうするのかという包括的計画を優先させているからである』と主張しています。ということは、新しい軍事対決を覚悟せねばならないのでしょうか？

答　…残念ながら、ジャジヤ先生（医師）は、故郷を追われた人々を帰還させるのが専門ではなく、人々を故郷から追われるようにするのが得意だ。ジャジヤがいなかつたら、キリスト教徒は、サイダからも、イクリムからも（サイダの東北）、サイダ郊外からも逃げ出さずにすんだだろうに。共産党とP.S.P.は、八五年のイクリム攻防戦で互尊重しあい、共産党とアマルの矛盾は解決され、レバノンの再建計画が建設される。

元の住民が党派の抗争に巻きこまれて、結果として故郷から追い出されることにならぬよう、政治解決の道をめざしたのである。しかし、ジャジャ率いるLFは頑としてこれを拒否し、人々は住み慣れた故郷から追い出されることになり、結局、LFが元からそれをしくんでいたことが立証された。したがって、ジャジャが現在行っている提案は、キリスト教徒へのうけを狙つたものである。実体的には、ジャジャの腹は、未だ東ベイルートという「ゲットー」の外に住んでいるキリスト教徒を「ゲットー」へ連れ込み、そこにキリスト教徒の国をでっち上げるというものである。

- ガルフ戦争

 - ・ クウェート市の目ぬき通りで爆弾隊派遣は考えていないと声明。
 - ・ ソ連、ガルフにおける米の軍事力が緊張の元凶と批判。
 - ・ ギリシア、ガルフへのギリシア艦国人人質釈放アピール発表。
 - ・ 「レバノン日本人記者の会」が外国人人質問題解決を樂観視していると語る。
 - ・ イラク大統領曰く「国連停戦案が包括的解決案でなかつたら拒否する」
 - ・ 仏、イランと断交。
 - ・ ワシントンで、レーガン－サッチャー会談。ガルフ停戦へむけ協議したとされる。
 - ・ イラン代表、モスクワでソ連大統領と会談し、ガルフの緊張を高めているのは米国と批判。
 - ・ 南部マグドウシェで、アマル対パレスチナ勢力の衝突。四月の停戦

以来初めて
ベリ法相、

- ペリ法相、東西ペイルート通過点のうち一カ所を「危険である」として閉鎖令。放近いだろうという報道。
 - パレスチナ問題
 - イラン系週刊紙、西独人質の釈迦
 - 駐イスラエルデンマーク大使、イスラエル政府に抗議。被占領地からECへの直接輸出拒否に關して(ECは今年から、被占領地を独立した援助対象にしている。八七年度の対西岸、ガザ援助額は二五〇万ドルである——編注)。
 - ガルフ戦争
 - イラン大統領、ガルフでの対米対決姿勢うち出す。また、近く出る予定の国連停戦案を批判。
 - 米帝、クウェート・タンカー護衛のため、八隻のガルフ艦隊を一五隻に。二一日(火曜日)からの護衛開始を発表。
 - イラン、三軍合同演習をガルフで行うと発表。
 - 米誌、イラン—米の秘密交渉を暴露。六月中に二回、ホルムズ海峡に配備した地対艦ミサイル問題についてとのこと。
 - ロンドンで、シャー時代のイラン

閣僚一名が車爆弾で軽傷負う
レバノン問題

- ・閣僚一名が車爆弾で輕傷負う。
 - ・レバノン問題
 - ・サイダでアマル対パレスチナ勢力衝突続く。
 - ・ハジビックラー、仏政府に対し敵対宣言。
 - ・レバノン左派紙、キリスト教徒右派将校の反大統領クーデター未遂事件を暴露。
 - ・パレスチナ問題
 - ・サウジアラビア、バグダッドサミット決議にのっとり、約三〇〇〇万ドルをPLOにカンパ。
 - ・元ガザ市長シャワワ氏、ガザで六七年来初のアラブ紙ホダ(「導き手」)発行許可とる。
 - ・七月一九日(日)トルコによるキプロス侵略十三周年記念日
 - ・ガルフ戦争
 - ・イラン、パキスタンに対し仏との「大使館戦争」に仲介要請。
 - ・サウジアラビア、七番目の衛星基地を二一日火曜日にオープンすると発表。
 - ・米帝ークウェートーーサウジアラビア合同の機雷掃海、一ヶ月間かけた掃海作業終了。今後、米艦護衛艦下のクウェート・タンカー隊がガルフに入る毎に、サウジの掃海艇四隻が、クウェート以南の掃海を

担当する。

- 中東和平国際会議の動き

 - ・仏外相、イスラエル訪問し、国際会議支持をうち出す。
 - ・モロッコ国王、五日間の英訪問了。
 - ・サッチャーが国際会議に賛成と語る。

カルフ戦争

 - ・イラン、北部・南部両戦線での攻勢を発表。イラク側は、南部戦線での衝突のみ認め、「撃退した」と発表（決議五九八採択前）。
 - ・国連安保理停戦案決議五九八採択（全会一致）。イランは「不公平」とし、直接交渉を呼びかける。
 - ・サウジアラビアのメディナ市で、イラン巡礼団が反米・反ソ・反イスラエルデモ。
 - ・クウェート首相、決議五九八受諾をイランに呼びかける。また、米軍にクウェート軍事施設利用はさせない点を確認。
 - ・EC外相会議、イラン・仏外交関係悪化問題につき、仏への「人道的、物質的」援助を約束。

- ト教徒右派のリゾク国会議員（南部ジャジーン選出）も出席（これが発端となり、L.F.のジャジャがL.F.に従わないキリスト教徒への圧力を強めていく。レバノン共産党書記長インタヅュー後半参照）。
 - 米帝・イスラエルの動き
 - ・シャミル、エジプト外相招待。
 - 中東和平国際会議
 - ・ソ連領事代表団、イスラエル公式訪問。
 - ・ロンドンで、サッチャーヨルダン国王会議。
 - ・アラブ連盟会長、ヨルダン訪問。
 - ・ヨルダン首相は、この会談後、訪英。
 - ・ムバラク大統領政治顧問、「シリアはアラブ合同代表団に参加する意向あり」と発表。

- ・ シリア外相、イラン訪問。
レバノン問題——シリア
- ・ ホス首相代行、シャムーン蔵相と初の経済問題対策会議。フセイン・国会議長が司会し、レバノン中央銀行総裁（マロン派）も参加。（ホス首相代行は金放出によるレバノン・ポンド買い支えを提案。シャムーン蔵相は、政府の各補助金カットによる財政支出のカットを要求。八月にシャムーンが急死するまで、平行線のまま。）
- ・ EC外相会議（コペンハーゲン）で、シリアとの高官レベル接触禁止解除を決定。英帝は「反対しない。しかし、英國はやらない」。西ベイルートで、シリア軍が「イスラエルにやとわれて反シリア作戦活動を行った」六人のスペイ逮捕。うち五人がP.S.Pとされる。
- ・ アラファト議長、グウェートで、アラブ連盟会長と会議を終え、チリア外相と会談。
- ・ 中東和平国際会議へむけた動き
- ・ エジプト外相、ワインでオーストリア外相と会談。
- ・ ソ連領事代表団（八人）、二〇年ぶりにイスラエル入り。
- ・ アラファト議長、「西岸、ダダニ

- 国連が信託統治下におき、その六カ月間のうちに住民投票を行うようにする考え方を支持する」と語る。

●イスラエル外務次官、エジプト訪問終え、帰国。

七月一四日（火）ガルフ戦争

 - 仏出入国管理官がスイスの空港で、乗り換えようとしているイラン外交官に暴行。イラン—仏関係さらに悪化。
 - イラクによる化学兵器で負傷したイラン人七人が、オーストリアへ。
 - ホメイニ師、イラン巡礼団にメッカとメディナで政治デモをするよう訴える。

レバノン問題——シリア

 - イスラミック・アマル（イラン支持）、仏の対イラン政策を非難。
 - ソ連、米・イスラエルに対し、次の点を要求。

一、パレスチナ人の自決権承認。
二、イスラエルは六七年戦争で占領したアラブ領土からの撤退を。
PLO政治局長、スペインで、スペイン首相と会談。

七月一五日（水）ガルフ戦争

 - シリア外相、ファハド国王にアサド大統領親書を手渡し、帰国。
 - 米ペンタゴン筋、クウェート・タンカー護衛準備としての潜水部隊による機雷掃海開始を発表。
 - オランダ政府、クウェートへの機雷掃海艇売却を許可。
 - 米ヘリコプター空母ガダル、カナル以下四隻が、スエズ運河通過し、紅海へ。行先は未公表。
 - テヘランのバザールで爆弾。

レバノン問題——シリア

 - 北部トリポリ、東部バールベックで反シリアル車爆弾。
 - トルコ首相以下大型代表団、シリリア訪問。トルコ首相のシリアル訪問は初めて。

中東和平国際会議へむけた動き
二〇%は、パレスチナ人（八〇万

- 第二三回 OAUサミット出席のアラファト議長、ムバラクとの会見があるだろうと噂されている。

- 諸国連の戦争をイランに受けさせるために、対イラン武器禁輸せよと迫る。
- 米帝、八月一六（二〇）の五日間、エジプトと合同演習「ブライト・スター'87」を行うと発表。
- レバノン問題——シリア

- パレスチナ問題
アラブアート議長、突然アブダビ入り。
- アルジエリア大統領、OAU会議からの帰路の途中、ルクソールに立ちより、エジプト首相と会談。

イスラエルは「S L A」が捕えている二五〇人のアラブ人捕虜と三人のイスラエル兵交換をシリア派に提案。ハジビッラーは拒否。

昨日、南部「セキュリティゾーン」内で、イスラエルのパトロール隊（三台の装甲車含む）に地雷まちぶせ攻撃。「甚大な被害を与えた」とレジスタンス側が発表。

レスチナ問題

昨日、ガザで、パレスチナ人の子供二人が死亡、八人が負傷。ゴミ箱の中に「捨てられていた」手榴弾で遊んでいるうちに、一つが爆発したとされる。

レバノン問題

・南部でのアマル対パレスチナ勢力の衝突続く。

中東和平国際会議の動き

・エジプト外相、イスラエルにてシヤミル、ペレスと会談。

七月二六日（日）

ガルフ戦争

・イラク軍、この三日間イラン爆撃

イランもバグダッド北西部を報復爆撃。

・仏国防省、二四時間以内にガルフに出航できる態勢となるよう海軍に

● エーニスティニア国営通信社
ガルフ戦争をイスラエルに設置。
七月二七日（月）

ガルフ戦争

・米帝、機雷掃海ヘリコプターのガルフ派遣を決定。

・西独外相、八七年末のイラク訪問を約束。

・ソ連副外相、イラク入り。イラク外相と会談（国連安保理決議五九八採択後、同副外相は中東工作中自主タンカー1船主国際協会、ガルフ航行商船保護のため、大国が国際艦隊を作るよう訴えた。

二四日は触雷したクサン・タラント、ソンカーのプリッジトン号（四〇万t）、二四万tだけ原油つみこむことになった。

仮艦隊三隻（空母クレマンソーラー率いる）、ツーロン港出航し、ガルフバノン問題へ。

レバノン検察庁、カラミ首相暗殺容疑者として、レバノン空軍技術者を国内・国際指名手配。手配を受けたサリビは、キプロス経由スエーデンに行つたところまで足取りがわかっている。

イスラエルは「SLA」が捕えている二五〇人のアラブ人捕虜と三

1987年9月30日 第27号 月刊 中東レポート

- ・ 駐レバノン米大使、スンニ派の力会見。
リド師訪問。
- ・ 中東和平国際會議へむけた動き
- ・ エジプト外相、イスラエル政府に
対し、「立場を統一して国際會議に
臨む」よう、呼びかけた。
- 七月二一日（火）
- ガルフ戦争
- ・ ソ連、ガルフ戦停戦へむけた米ソ
の共同努力を呼びかけたレー・ガン
親書に、賛成を表明しつつ、米の
軍事力増強が問題と指摘。
- ・ レバノン紙、レバノン人の三〇歳
以下の男女のメッカ巡礼をひかえ
るようにという政府声明を発表（ダ
マスカスのサウジアラビア大使館
で行われた会議の結果）。
- ・ ベカレでは、ハジビッラーがイラ
ン支持の集会。五〇〇〇人。
- ・ 西ベイルートで誘拐未遂事件。シ
リア兵負傷。
- レバノン問題

問題を討議していくのにむけた準備活動)。

- ・エル訪問中のエジプト外相に、共同声明手渡す。
- ・米帝——イスラエルの動き
- ・イスラエル、中距離ミサイル・ジエリコ（射程距離一四〇〇キロ）試射に成功。
- 七月二三日（木）
ガルフ戦争
- ・イラク外相、「イランが同意するなら国連停戦案受け入れる」と発表。
- ・イラン外相、西独入り。
- ・サウジアラビア、一昨日のレバノン紙報道を否定。
- ・カダフィ大佐、駐リビアイラン大使と会見。イラン大使は「米帝とガルフ地域で対峙していく」と伊朗の立場説明。
- ・イラン経済・国際関係担当副外相パキスタン訪問。ガルフ情勢、アフガニスタン問題につき、ハク大統領と会談。
- ・レバノン問題

二隻のクウェート・タンカーのうち一隻が触雷。船体に穴あくも、そのままクウェートへむけ航行。西独（現国連安保理議長國）、開戦責任はイラクにあるとコメント。アラブ連盟国連オブザーバー、「ガルフにおける米軍存在が暫定的であるよう望む」と発言。

バノン問題

南部のアマル対パレスチナ勢力の衝突続く。

アフリカ航空機、ハイジャックされたが、イスラエルでとりおさえられた。

バールベックのハジビッラー系病院、爆弾攻撃うけた。近くのザハレでは、ホベイカ事務所に車爆弾（三回め）。

駐レバノン米大使、レーガン親書をジェマイエルに手渡す。七月初旬の米国連大使によるシリア訪問に関する件、また、レバノンの統一と独立支持という米政府の立場を表明したとされる。

レバノン問題

- レバノン問題
 - ・G F U 会長、二二二日のゼネスト指令発表。
 - ・アマル対ペレスチナ勢力の衝突、

緊急經濟委員會。

びかけのゼネスト（三回め）。

- パレスチナ問題
 - ソ連移動大使、ムバラクと会談。
 - パレスチナ国家樹立支持を再確認
 - （ソ連側）。
 - 緊急経済委員会。
 - 米国連大使、「シリアとの会談時テリー・ウェイト氏は生きている」という感触を得た」と語る。
 - びかけのゼネスト（三回め）。
 - イスラム・ジハド、ベイルートで仏への警告発した。

びかけのゼネスト（三回め）。

-16-

- レバノン問題——シリア
 - ・サイダで殺されたアマル民兵メンバー三人の問題について、パレスチナ側とアマルの間で協議中。
 - ・アラブ連盟代表、イラクからシリア人パイロット（先月二八日、イラクに撃墜された）をひきとり、イラク出国。明日、シリア着のみこみ。
 - 八月六日（木）ヒロシマ・デー
 - ガルフ戦争
 - ・メッカ事件で死亡した、少なくとも二七五人のiran人巡礼者の遺体を運ぶためのiran機がサウジアラビアのジエーデ市に到着。
 - ・イラン当局、サウジアラビア大使館員四人の行方不明問題について「巡礼の安全が保証されない限り報復の用意あり」と表明してきたが、三人を釈放。「サウジアラビアもイラン大使館包囲を解除。
 - ・イラク「新型地対地ミサイル（射程六〇〇～六五〇キロ）でテヘランを攻撃する」と表明。
 - ・仏、イランからの原油輸入停止。
 - ・米NSC長官カールリッチ、ガルフ合同機雷掃海隊にむけ、英、仏西独を工作旅行。
 - ・シャーの長男、パリで「亡命勢力よ、時がきた。私の許に結集せよ

八ガ

- と発言。
カラミ首相暗殺容疑者サリビの身柄引き受けにスウェーデン訪問したレバノン検察代表団、サリビを尋問（スウェーデン政府、引き渡そうとしないので）。
西ベイルート各大使館の保安対策強化。
サイダ東のマグドウシエでアマールとパレスチナ勢力の戦闘つづく
東和平国際会議へむけた動き
米国務省北アフリカ近東局長マー・
フィー「シリア・イスラエルの直接対話が和平には最も有効」「パレスチナ人代表が和平交渉には含まれるべきだが、PLOは論外」と発言。
米国務長官シユルツ、特使ヒルのイスラエル派遣を発表。「中東和平国際会議にむけ新提案が出されはいるが、開催にこぎつけるには、まだまだ時間かかる」
月七日（金）
ヘルフ戦争
メッカ事件で殺されたイラン巡礼者五一人の遺体がテヘランに戻りテヘランでは、数万人の反米デモが行われる。
米国務長官、「米国は、イラン・

1000 1000

- イラク戦争に介入するつもりはない。……米国に友好な国はイランに恫喝されないことを明らかにした」と米議会で演説。
ソ連外務省は、イランとの間に天然ガスパイプラインの再開と鉄道敷設の交渉をしていることを明らかにした。
中国は、イランから年間一〇〇万トンの原油を輸入する協定に調印伊、国連安保理に、多国籍軍による機雷掃海を提案。
キリスト教徒右派の巨頭、元大統領のカミール・シャムーン、八七歳で病死。
月曜日（土）
ルフ戦争
(機雷掃海ヘリの到着まで)米帝ラビア着。七〇年代中葉五年間駐クウェート・タンカー護衛延期と発表。
新駐サウジ大使ホラン、サウジアラビア着。サウジ米大使代理をつとめ、アラブ通で知られる。
西独外務省、ガルフへの海軍派遣は行わない再確認(西独憲法はNATO圏外への西独軍の派遣を禁止しているので)。イラク、イランが近く地上戦攻勢

—
—
—

- をかけようとしている」と発表。
イラン大統領、「地対艦ミサイル
発射実験に成功した」と発表。
バノン問題
シャムーン、出生地のシユーフ山
デル・アル・カマルに埋葬される
(現在はPSP統轄下)。
サイダ東、マグドウェで戦闘
つづく。アマル対パレスチナ勢力
レスチナ問題
PLO筋によると、リビアがPLO
O事務所再開を許可した。
月九日(日)ナガサキ・デー
ルフ戦争
イラク発表「イランの長距離砲に
よって、北イラクのクルドの町カラ
・デザが攻撃を受け三人死亡し
た」。他方イラン側は、北西イラ
ンの町に爆撃を受け、五人死亡、
と発表。
イランのフセイン、ムサビ首相、
ガルフ地域に超大国が居する限
り、ガルフ内の航行は危険だろう
と警告を発す。
米国防省長官ワイン・バーガー発言
「米軍はクウェート港の機雷を破
壊した。この機雷はイランのもの
と特定することはできないが、そ
うと信ずるに足る理由は十分であ
る」

- ガルフ戦争

七月三一日（金）

 - ・イラク大統領、イランとの関係保持を重視しているとして、西独批判。
 - ・元イラン首相のバニサドル氏、「イランが三億五〇〇〇万ドルをレバノンにつきこみ、シリアの地位強調のために利用している」とイラン批判（レバノン右翼放送）。
 - ・メッカで巡礼団と治安軍衝突。
 - ・国連安保理、南部レバノンのU N I F I L 駐留の半年延長を決定。
 - 八月一日（土）
ガルフ戦争
 - ・クウェートタンカー「ガス・プリンス」クウェートを出航。
 - ・アブダビで、P L O アラファト議長、イスラム指導者の緊急首脳會議の呼びかけ（ガルフ情勢の緊張の高まりについて）。
 - ・テヘランでは、サウジ、クウェート、仏の大使館を群衆が攻撃、占拠。サウジアラビア大使館の四人クウェート大使館の二人は行方不明。
 - ・サウジ情報相、「メッカ事件ではサウジ治安軍は一発も射っていない。巡礼者が王死した」と発表。

- イラン外務次官、シリア訪問。アサド大統領から、メッカ事件のイラン巡礼犠牲者の本国移送への協力をとりつけたとされる。

八月二日（日）

バルフ戦争

イラン代表団、メッカ事件調査のためにサウジ入り。サウジアラビアは、謝罪を期待していたので、即帰国してもらうことになった。テヘランで、昨日行方不明になつたクウェート大使館員二名釈放された。

アラブ各国からファハド国王への連帯メッセージ。エジプト、ヨルダン、レバノン、モロッコ、チュニジア。

イラン国会議長、サウジ王制打倒メッセージ解放、奪回を呼びかける。テヘランでは復讐を誓う一〇〇万人デモ。

米帝のガルフ機雷掃海協力要請に伊、仏、英、オランダから否定的反応出ている。

イラン内相、サウジ内相に非難のメッセージ。「米国の指揮を受け、警察が行動した」ソ連外務次官、イラク訪問を終えシリアルへ。シリアル外相と、ガルフ情勢について討議。

• ガ 八

- バノン問題——シリア
ジエマイエル大統領顧問（スンニ派）が、西ペイントの自宅で暗殺された。

レスチナ問題

被占領地ガザ市で、軍用車に乗っていたガザ市のイスラエル治安長官を射殺。イスラエル当局は直ちにガザ市につながる道路、海路を封鎖。外出禁止令と街中の店の閉店を強要。

カルフ戦争

日帝、駐日イラン大使に、メッカ事件への対応は「知恵をもって、穩便に」行うよう、倉成からイラン政府への申し入れを伝える。

ファタハのアブ・イヤド、イランの侵略に対する緊急アラブ首脳会議開催を呼びかける。

バノン問題

昨日、西ペイントの、サウジアラビア文化センターとサウジ航空事務所で爆弾爆破。閉鎖中のサウジ大使館も爆弾投げこまれた。

月四日（火）

ルフ戦争

インド訪問中のアラファト議長、メッカ事件に関して「非常に悲しみべきことである」「巡礼の期間

• •

- 中に政治デモをすべきではない」と語る。イラン、ホルムズ海峡で軍事演習を開始。ソ連副外相、イラン訪問了。バノン問題。イスラエル国防相、イスラエル軍が南部レバノンでUNIFILのノルウェー部隊を攻撃し、ノルウェー兵士を負傷させた件で、公式謝罪。帝——イスラエル米海兵隊、ソマリア北部で敵前上陸演習（「ブライト・スター'87」の一部）。レスチナ問題ガザ市に、数百のイスラエル兵が増強され、外出禁止令が強化される。ルフ戦争。ファハド国王、イスラムの聖都メッカとサウジの領土の防衛を誓う表明をする（メッカ事件後初めての公式見解）。

メッカ事件で死亡した五八人の遺体と三八人のケガ人がイラン機でテヘランに戻る。テヘランで、シリア外相、ハメイニ大統領、ムナビ首相と会談。

- イランの国連大使は、「我々はガルフに機雷を敷いているが、イランも同様に敷いている。しかし我々は国際航路には敷いていない」と表明。
- イランの国会議長ラフサンジャニ、「西独紙のインタビューにこたえて『イラン船がホルムズ海峡の航行を阻止されたら、イランはホルムズ海峡を閉じる』と発言。
- パレスチナ問題
- イスラエル政府は、東エルサレム電気会社が、東エルサレム区に電気供給を続けることを認める決定。
- 西岸ナブルス市でイスラエル軍パトロール車に火災ビンが投げられ、イスラエル兵一人負傷。
- 米帝——イスラエル
- イスラエル議会外交・財務委員会、國産戦闘機ラヴィ開発、生産計画継続賛成。二二対六。
- ワシントン・ポスト紙、レバノンで誘拐された人質救出作戦をイスラエルが共同するという作戦プランが八五年に存在していたことを暴露。
- ガルフ戦争
- 西ベルリンの六人のイラン領事部メンバーが、西ベルリンから追放

- 米のスープーランカーがホルムズ海峡を出たオマーン沖で機雷に触れて損傷を受ける。
- ホメイニ師、メッカ事件の責任は米国にあると非難し、報復を誓った。
- イラク発表「イラク機は、イラン北部の都市タブリズの精油施設、西カズスタン地区の油田を攻撃した」
- 北部の都市タブリズの精油施設、西カズスタン地区の油田を攻撃した
- レバノン問題
- ミスチコー議長は「イランの石油タンカーの航路に機雷を敷設すべき」と主張。
- パレスチナ問題
- ホス首相代行「政府保有の金の二〇%を放出して、八〇万ドルを確保し、最悪の危機を脱すべき」と表明。
- 九日と一〇日の被占領地北パレスチナへのロケット攻撃の責任をアタハ革命評議会派とSSNP(シリヤ社会主義民族党)が発表。
- イスラエルの武装ヘリコプターは南レバノンのシーア派の村(カカリエ・エル・ジスル)を攻撃、村民一人死亡。ハジビツラーの拠点

二〇回めの爆撃)

パレスチナ問題

- PLO中央評議会議長(PNC議長兼任)、八月末のチュニス開催予定のPLO中央評議会に全党派の結集を呼びかける。アルジェリアでの第一八回PNCをボイコットした勢力が主対象。被占領地問題を討議し、「パレスチナ人の行動を統一するため」。

- PLOとヨルダン、シリア関係も「近く正常化されよう」と語る。

- 米国防省発表、七月二十五日にヨルダン軍と米軍の共同軍事演習「シヤドウ・ホーク」の最中、F16が墜落事故を起こした、と。

- 米特使チャールズ・ヒル、シャミルと会談(ヒルは、中東和平国際会議実現にむけて包括的提案をもつてきた、といわれている)。

赤い大輪のケシの花の押花が、机上においてある。ベカ高原から贈られたものだ。そういうえば、ローザ・ルクセンブルグが獄舎の庭の花を押花したという史実がある。しかしこれは違う。祖国をはなれて二十年近くパレスチナ解放闘争に参加し、パレスチナの人々とともに戦場としているベカ高原の野性の花の押花である。

「团结I・II号」そして「大地に耳をつければ日本の音がする」「資料中東レポートI・II」などの著書を示してくれ「アラブより愛をこめて」など一連の個人著書、合流した戦士の「永田洋子への手紙」などの著作を彼らは提供しつづけている。

これらは時の流れのなかで生れた闘争の指針であるだけでなく、自らの経験の集大成であり、自己批判の書でもある。

「月刊中東レポート」も同じであり、われわれはそれを共有する。

ベカの夏は、昼夜の温度差がはげしく感じられる毎日です、でも湿度が少ないので気分は爽快で健康的です、と彼らはいう。

訂正

25号4ページ3段めの後ろから一行め、反キリスト教統一戦線は右派戦線の誤りでした。お詫びして訂正いたします。